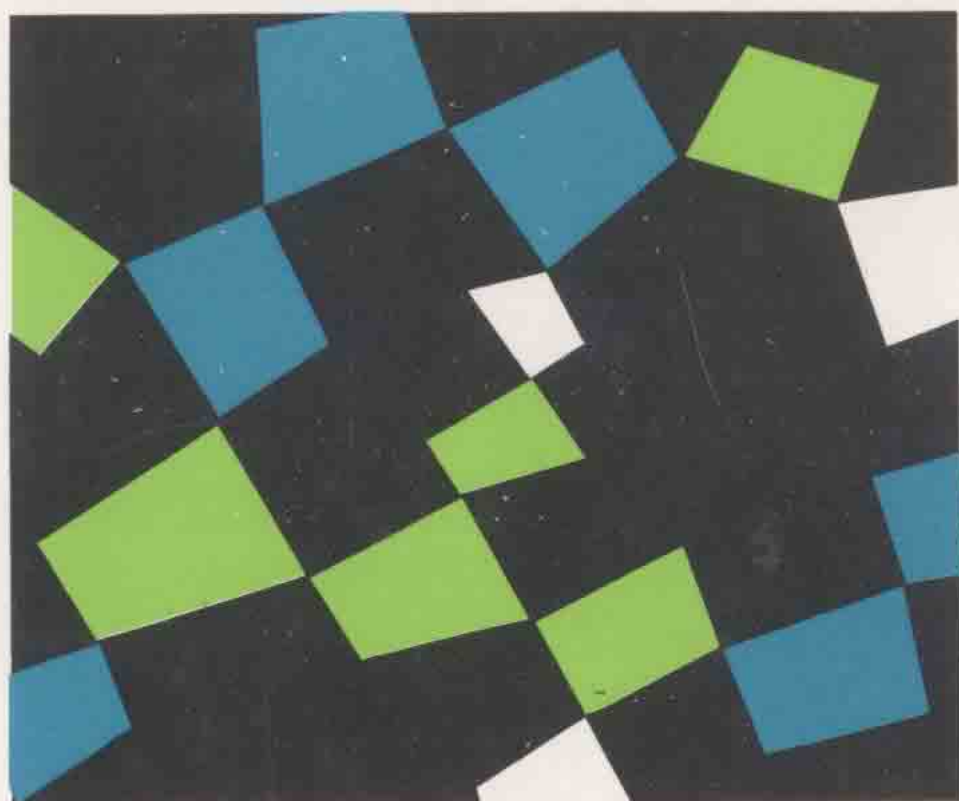


# 楡家の人びと(下)

北 杜 夫



新潮文庫

---

にれ け ひと  
楡 家 の 人 び と (下)

---

新潮文庫

き - 4 - 7



昭和四十六年五月二十五日 発行  
昭和六十二年三月十五日 三十三刷

著 者 北 杜<sup>もり</sup> 夫<sup>お</sup>

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
業務部(〇三)二六六一五一一  
電話 編集部(〇三)二六六一五四四〇  
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

---

印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社

© Morio Kita 1964 Printed in Japan

---

ISBN4-10-113107-4 C0193

新 潮 文 庫

愉 家 の 人 ひ と

下 卷

北 桂 夫 著

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



榆家の人びと  
下卷



## 第二部（続）

## 第六章

大人たちの世界に、さまざまな波瀾、葛藤、悩み事や怨み事が絶えぬにせよ、子供たちには子供たちの世界があった。

一本の釘、一片の木片れが、そこでは全く別の魔法的な存在になったりする。ましてようやく新建築にとりかかった青山の楡脳病科病院分院の普請場には、おもしろいものがたとあった。ぴかぴか光った五寸釘が、或いは折れ曲った鋸が、或いはくるとまわる車のついた滑車が落ちていた。周二はそういうものを丹念に拾ってきて、自分の玩具箱——蜜柑箱に紙を貼ったものであったが——の中に大切に蔵いこんだ。小学生になっても、この末っ子はそんな釘なぞに興味を抱く性があった。

ある日の昼休み、姉の藍子が、青南小学校の最近できあがったコンクリート建ての校舎の校庭で遊んでいると、下級生の周二が仲間からも離れ、たった一人でうろろと地面を見つめて歩い

ているのが目にはいった。藍子のほうはますますおしゃまで、顔立ちも服装もクラスではまず上等の部類に属するため、同級生の間でも牛耳をとる大将株となっていた。なにより彼女には母親ゆずりのためか、早くも我儘で勝手なところが垣間見られた。新校舎を建築する一年近くの間——それは周二が入学してまもなくのことだったが——青南小学校は元ノ原にバラック校舎を建てて二部授業を行なった時代がある。元ノ原は楡家のすぐ前であった。そこで藍子は学校に弁当を持ってゆかず、なにか口実をもうけて毎日家へ帰ってきて昼食をとった。そのほうが御飯も温かくいろいろおかずも食べられるからという理由より、なにか他人と変ったこと、他人にはできぬ真似を実行するのが彼女は好きなのであった。

さて、常々だらしなくめそめそしがちの弟が、いやに真剣に地面を見つめて校庭をうろついているわけを藍子は知っていた。周二はボタンを、服やシャツについているボタンを捜し求めているのである。藍子自身はすでに下田の婆やの愛情を求める時代を過ぎていたが、周二のほうはまだにぬくぬくと婆やの庇護の下にあった。いつも達者な下田の婆やも、さすがに近ごろは目がわるくなつてきて、殊に裁縫のとき針に糸を通すのが困難になっていた。たまたま周二がそれをしてやると、この主家の最後の男の子には目がない下田の婆やは、すっかり感動してほくほくと相好を崩した。さらにあるときシャツにつけるボタンがないとこぼしていた婆やの言を耳にした周二は、偶然道端で一つのボタンを拾ってきた。下田の婆やは表現に苦しむほど感激し、女中から書生から尋ねてくる知合に至るまで、周ちやまがいかにかけのよい坊ちやまであるかを説いてやまなかった。そのため婆やをもっと喜ばせ、もっと讃められたいという一心から、周二はボタ

ンを捜しだしたのである。校庭を丹念に捜すと、意外に多くの各種のボタンが落ちていた。そのため周二は休み時間になると、仲間の活潑な遊びにも加わらず、いや、ときには仲間はずれにされることもあるしかかったが、とにかくたった一人で、うつむいて、地面を真剣に見つめて歩きまわっているのだった。今も藍子がこちらから眺めていると、彼はかがんで何かを——もちろん一つのボタンを拾いあげてポケットに入れた。その瞬間、陰気で元氣のない彼の顔に、大層な宝物でも発見したような喜びに近い表情がぱっと閃くのを藍子は認めた。

いやあねえ、まるでバタ屋みたい、と藍子は自分が侮蔑を受けたかのように眉をひそめた。まずいことに、常々藍子のそばに家来のようにつき従っている女の子が、その周二の行動を目にとめて言った。

「あすこにいるの、楡さんの弟さんでしょう？ 何をしてるのかしら」  
さらにまずいことに、向うでは周二がまたしてもかがみこんだ。何かを拾ってポケットに入れた。

藍子は友人の疑惑を打消すように、活潑にひと息に言った。

「あれはね、本当の弟じゃないの。親類の子なのよ。……さあ、どいけつしましょ！」

そして彼女はいきなり無警告にすばやく横にとぶと、その女の子の尻にむかって思いきり自分の尻を突きだした。不意を喰らった相手は、前にのめってぶざまに手を突いたが、この乱暴な藍子の行為も、まわりにたむろする仲間から非難されはしなかった。むしろみんなは藍子のいつもながらの水際立ったすばやさを賞讃して、笑ったり拍手したりした。藍子自身も笑った。してや

ったりと得意になり、バタ屋同様の弟のことなんかすっかり忘れてしまつて。

藍子は、往時の桃子よりも更に頻繁ひんぱんになんの遠慮もなく青雲堂の店先に現われ、目ばしい品物を、実際は必要もないくせに、片端から持去つた。弟の周二も最近は一人でやつてきて、無代たの買物の味を覚え、めんこだのビー玉だのを持っていって、このほうはまだ小母おはさんの顔いろを窺うかがいながら線香ピストルを取りあげるのだった。画用紙にしるノートにしる、弟のほうがいいものを持つてゐることは藍子には我慢ならなかつた。弟が新しく十二色のクレヨンを買えば、彼女はさつそく二十四色の金色や銀色まであるクレヨンを買つてきた。彼女は店開きができるほどのビーズや千代紙やぬり絵やうつし絵や消しゴムなどをどっさり所有してゐた。ぬり絵というのは白紙にミッキイ・マウスやベティ・ブーブの絵が線だけで描いてあつて、そこへ自分で色を塗るわけなのだが、むら氣な彼女はベティ・ブーブの口元にだけ色を塗つてそのまま放つておくことも多かつた。すると、こちらは米国よおくにの氣質を引継いでどことなくけちな周二がそれを拾つて、空白の髪とか服とかを丹念に彩色した。うつし絵を水で塗らして何かに貼りつけ、やがて静かに紙をとり去ると、あとに綺麗きれいな絵が残る。「ちよつとじつとしてらっしゃい！」と藍子は言つて、弟の手やら足やら額にまでもこのうつし絵を貼りつけた。学習院から龍子が輸入した基一郎好みの「龍さま」「聖さま」という呼称は、今では藍子にわずかに残されていた。彼女は一同から「藍さま」と呼ばれ、知らぬ人がこの呼名にいぶかしげな顔を見ると、またそれが得意らしかった。

彼女には作り話をする才もあつた。下田の婆やが幼いころよく聞かしてくれた「青山墓地から白いオバケが……」という歌から、まことしやかな体験談を作りだして弟をおびやかしたりした。

「赤いオバケっていうのは本当にいるのよ。立山墓地の真ん中にすごく太い楠くすの木があるでしょ。あそこに出たわ。そりゃ凄すごい顔をして、顔いろはあおじろかったけど、破きれて穢きたない赤い着物を着てたわ。つまり、赤いオバケっていうのは着物の色なのよ。そりゃおっかないんだから……。

白いオバケのほうも、青山墓地のほうへ行けばきつと住んでるわ」

そのため周二はかなり大きくなるまで、なかなか墓地に近寄ろうとはしなかった。以前は聖子の墓がそこにあった。しかし基一郎の墓が浅草の日輪寺につくられたため、聖子の墓もそちらへ移され、ひしめいて並びたつ数限りない墓石、にがいような匂においを放つ常緑樹の生垣いけがき、鬱蒼うつそうとした木立の群れ、妖怪変化ようかいへんげがたむろしていてもよさそうな広大なその墓地は、楡家とは無縁なものとなっていた。

藍子はたしかにその叔母以上に、明るくおしゃまで活潑であつた。ある雪のつもる寒い冬の日、学校が休みとなり、彼女をいたく喜ばせた。昭和十一年の二月の末、皇道派青年将校に率いられた軍隊の一部が、重臣を襲い、警視庁、内務省、参謀本部、陸軍省を占領したのである。翌朝、兵隊から帰ってきて専修大学の夜学部へ通っている書生の佐原定一が慌あわただしくやってきて、「赤坂のほうで市街戦がありそうで、流れ弾だまの危険があります」と報告した。下田の婆やは事態がどういうことか判らぬながら顔色を変えた。下の子供たちを奥の間に閉じこめ、「この部屋から一歩もお出になつてはなりません」と命じた。子供たちはもっと訳がわからなかったものの、少なくとも学校が休みとなつて浮々した。殊ことに「流れ弾」という文句は藍子の好奇心、冒険心を一方ならなくすぐり、彼女はせつせと夢中になつて沢山の蒲団ふとんを奥の間に運びこんだ。彼女は『少女俱

『楽部』よりも『少年倶楽部』の愛読者で、『のらくろ』や『冒険ダン吉』はもとより、山中峯太郎、平田晋策、南洋一郎の冒険軍国小説に親しんでいたからだ。藍子は蒲団をぶ厚く積み重ね、そこを塹壕と見なして、勇ましくその上に高々と上半身をのぼして叫んだ。

「さあこい、便衣隊め！」

一方、周二のほうは「流れ弾」にすっかりおびえて、蒲団の塹壕のかげに小さく縮こまっていた。彼も近所の子供たちと一緒に日曜日に三連隊の鉄砲山へ遊びにゆき、笹の茂る土の間から空の葉莢を二つほど拾ってきたことがある。それは小さいながらもずっしりとにぶく重い手ごたえがあつて、もしこれに弾丸と火薬がつめられていたなら、どんなにか眩暈のするほど素晴らしくかつ危険なものであるかが想像できた。その弾丸が本当に、次の瞬間にも壁を貫き障子を破つてとびこんでくるかもしれないのだ。そこで周二は息をつめ、じつと蒲団の塹壕から動かなかった。

この二・二六事件は、やがて「下士官 兵に告ぐ」という劇的な放送、飛行機からのビラの撒布によって幕を閉じた。「今カラデモ遅クナイカラ原隊へ帰レ。抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル。オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテヲルゾ」

事件の真相はろくろく理解できなかったものの、この文句はしばらく楡病院の内外に於て屢々用いられた。たとえば藍子たちは往々西洋簞笥と呼ばれる大机の引出しに藏つてある菓子を無断で食べる。弟がどうも大量の菓子を盗んだ形跡があると、藍子はせい一杯の大人びたこわい顔、威嚇的な声音をつくって言った。「こら周二、今からでも遅くはない、白状しろ」

勝気な藍子は、ベルリン・オリンピック大会のときにも並々ならぬ興味を示した。ちょうど夏

で箱根に行っていて折角の短波放送は聞くことができなかったが、マラソンの孫や三段跳の田島や水泳の寺田や葉室などの優勝には心からの拍手を送り、なかならず「前畑がんばれ」の台詞、長身の外人選手を相手とする村社の健闘は、彼女の胸に刻みこまれたようであった。のちに『民族の祭典』という映画がきたとき、彼女は膝のうえに両腕を突っぱってこれを鑑賞した。

そのときは珍しいことに、たまたま徹吉が峻一と藍子を映画に連れていった。それは美しいといつてよいすぐれた記録映画で、ただ新興ナチス・ドイツは前年ヴェルサイユ条約を破って再軍備宣言を行なったが、再軍備も何も、すでに高らかに真直に足をのばして行進するそのたくましい軍隊の写真は、その前から新聞や雑誌で頻繁に見ることができた。しかし、それは頼もしい盟邦の力強い姿として人々の目に映じた。なぜなら、共に国際連盟を脱退し世界の孤児となった日本とドイツは、しばらくまえお互いに手をのばしあい、運命の防共協定を結んでいたからである。軍隊にしろ学問の世界にしろ日本は昔から多くドイツに学んできた。その潜在的なドイツ崇拜、根強いドイツ最良が、ようやく明瞭にあからさまに、往々行きすぎた形となって巷に溢れ、庶民の口の端にもものぼるようになっていた。徹吉とてもその例外ではなかった。彼は、あきらかな示威のためのオリンピックを開いたドイツに負けず劣らず二九四名もの代表団を派遣した日本の選手たち——入場式に於て日本選手団は戦闘帽のようなものをかぶっていた。前回のロサンゼルスときにはカンカン帽であったのだが——と共にドイツ選手にも内心声援を送りながら、しばらく自分の数年来の仕事のことも忘れ、ちらつく画面に眺め入っていた。女子の四百米リレー競走であ

ったか、ドイツ選手は圧倒的に先を走っていた。と、バトン・タッチの際に、なんとしたことか次の選手がバトンを受け損<sup>そこな</sup>い地上に落してしまった。瞬間、画面は代り、身を乗りだして熱心に観戦している總統ヒットラーの姿が写った。大ドイツの優位が一举にくつがえされたその瞬間、独特の鍔<sup>つば</sup>の短い軍帽をまぶかにかぶり、鉤<sup>かぎ</sup>十字の腕章を腕に巻いたその威厳たっぷりの總統は、身体を前のめりにして、少し顔をかしげて、いかにも無念やる方ないといった表情で苦笑をした。それはごく自然に觀衆の微笑を誘う、ほとんど人が好いといってよいほどの動作であり表情といえた。

「ヒットラーか」と、徹吉は暗闇<sup>くらやみ</sup>の中で、心の片隅で呟<sup>つぶや</sup>いた。「あの男はなかなかやる。ドイツも見事に復興したものだ」

そして彼は、あのミュンヘンの騒動をちらと追想し、一庶民の常として、なにか自分と無関係でないような気がするこの盟国の總統に、またしても説明もつかない或る親しみを抱いた。

「惜しいわね、惜しかったわね」と、かたわらで藍子が昂奮<sup>こうふん</sup>して言うのが聞えた。

「静かに！」と、周囲の人に気がねをして、ずっと年長の長男の峻一が言った。……

藍子は単独で、或いは弟を連れて、よく隣にある病院へ遊びにいった。すでに青山の楡脳病科病院分院の新築は完成されていた。それは往時の楡病院のように人の目を瞠<sup>みは</sup>らすところは何ひとつなかったが、小ぢんまりと瀟洒<sup>しょうしや</sup>な車寄せから玄関の辺り<sup>あた</sup>、クリーム色に塗られた二階建てのその前面は、精神病院につきものの陰気なかげは少しもなく、ちょっとしたホテルとも見受けられた。開院式のとき、あちこち見学した歐洲<sup>おうしゅう</sup>が「なんだ、傘立てまでしゃれているじゃないか」と、

ぶつきら棒に世辞を言ったほどである。しかし裏手のほうまでは手がとどきかねた。結局以前からあった古い病棟を移転させ改造して新家屋と結びつけたにすぎなかった。

藍子は病院の玄関からはいって行って、バットの空箱で作った土瓶敷<sup>どびんしき</sup>が幾つもある事務室にたむろしている会計の大石とか運転手の片桐<sup>かたぎり</sup>とかと、こまっちゃくれた会話を交わす。次にヨードフォルムの匂いのする薬局に行くと、白い上っぱりを着た菅野康三郎がなにか薬包紙をせつせと包んでいる。「あたし、頭が痛い。どういふものか頭が痛いんだわ」と、藍子が真赤な嘘<sup>うそ</sup>を言う——それは桃子叔母さんが少女時代使っていた手で彼女に教えこんだものだった——康三郎は何もかも承知して、無色の薬用シロップと赤葡萄酒<sup>あかぶどうしゅ</sup>をいくらかコップにつぎ、水で割って渡してくれた。これは甘くておいしかった。それにコップを日に透かして見ると、赤い血液に似た液体の中によく溶けきらぬ濃い透明なシロップが縞<sup>しま</sup>をなして淀<sup>よど</sup>んでいて、藍子はそれをなにか貴重なもののように日にすかして見てしばらく愉<sup>たの</sup>しむのだった。この飲料は薬局でわざわざ調合したもので、そこの店では売っていないものにちがいはなかったから。周二もこの気つけ薬——と康三郎は言った——を非常に好んだが、それは祖父ゆずりに愛飲していた赤いサイダーのボルドーが、そのころ会社がつぶれてしまったのか飲むことができなくなっていたのも原因であるらしかった。

気つけ薬を飲み終ると、藍子は長い廊下を裏手の病棟へと走ってゆく。途中にぶ厚い黒ずんだ扉があつて、ノックをすると、看護婦<sup>かぎたは</sup>が鍵束<sup>かぎたば</sup>をがちやつかせながら扉をあけてくれた。するともう藍子は、見慣れたくすんだ色合の、特有の臭気のこもる廊下を元気よく駈<sup>か</sup>けて行って、看護部

屋にとびこんで蜜柑を貰ったり、廊下を歩いている病人——精神病者にちがいないのだが——に  
 氣易く話しかけたりした。

「どう、小母さん、お元気？」

「ええ、ええ、あたしゃいつだって達者なもんですよ」

その初老の女患者はむっとしたようにそう答えた。彼女の髪は蜘蛛の糸のように細い縮毛で、  
 いつもぼしゃぼしゃと額にたれかかり、そして着物の前もだらしなくはだけていたものの、どぎ  
 つい白粉と口紅の化粧だけは怠らなかつた。よく彼女は廊下でビスケットを齧っていた。そのビ  
 スケットを半分に割ってやはりむっとしたような顔つきで藍子に与え、いやに長い赤い舌をべろ  
 りと出して口端を嘗めた。その長い赤い舌が現われると、濃い口紅までが色褪せて見えた。

藍子は患者たちを少しも怖れはしなかつた。もとよりここにいるのは軽症の患者で、自由に廊  
 下を歩いたり娯楽室でピンポンをやったりしており、もっと重い狂暴性をもつ人たちは松原の本  
 院へ送られる筈であつた。藍子はここに住む病人たちを——もちろん見るからにおかしな女もい  
 て、その女は話しかけても返事をせず単にへらへらとふぬけたような笑い声を立てた——べつに  
 世間の人たちと変りのない気がねのない友達くらいに思っていた。桃子叔母さんの話のように札  
 を作る人こそいないようだったが、殊に孫悟空さんは面白かつた。その中年の坊主頭の男はいつ  
 も娯楽室の長椅子に腰かけていて、間断なく、膝から下ががくがくゆれるほどの貧乏ゆすりをし  
 た。藍子は平気でちょこんとその膝に腰かける。するとまるで木馬にでも乗っているような気が  
 した。孫悟空さんはときたま彼女に長たらしい話をしてくれた。その話の中では、彼自身はいつ

ものように孫悟空であつたり本当の姓である島岡という男に戻つたり或いは支那<sup>しな</sup>の帝王になつたりして、まったく辻褄<sup>つじつま</sup>があわず、それも話すにつれて益々支離滅裂になつてゆくようであつた。

この人はあたしが子供だと思つて出鱈目<sup>でたらめ</sup>を言っているのだわ、と藍子は唇を噛んだ。そこで今度は彼女が話した。「あたしがねえ、学校へ行つてたらねえ、その学校というのは校庭がみんな墓地なのよ……」そして藍子は相手に負けず劣らず途方もない作り話をした。

「世間の人は氣ちがいをこわがってるけど」と、彼女は考えた。「氣ちがいなんてそれほど變つたものじゃないわ。あたしが看護婦さんになつたらみんなすぐ癒<sup>なお</sup>しまうわ」

なるほどその病棟には藍子の胆<sup>きも</sup>をひやすような患者はいなかったけれど、もし彼女が昼前にここを訪れたらやはり胆を冷やしたことであろう。なぜなら、日本にもインシュリン・ショック療法がはいってきて、楡病院でもしきりに行われていた。ついに早発性痴呆<sup>ちほう</sup>、新しい名称でいえば分裂病患者に対する有力な武器が現われたのだ。徹吉はかなり古い患者にまでその治療を命じていた。インシュリン療法の昏睡<sup>こんすい</sup>におちいる前とその覚醒期<sup>かくせいき</sup>には、病者は屢々<sup>しばしば</sup>異様な吼声<sup>ほんこえ</sup>を、精神病院にふさわしい叫び声をあげる。だが、それは遅くとも昼ですみ、また日曜日にはこの治療は休みとなつた。

藍子は、患者さんたちは普通の人とさして変らないと思ひこんでいるくせに、学校で友達に尋ねられると、どういうわけか、心とは裏腹の出鱈目な作り話をした。

「そりゃあおかしい人ばかりよ。恐水病<sup>こうすいびょう</sup>というのは水をこわがるのよ。水を一滴飲んでも死んじまうわ。そのほか恐木病<sup>こうもくびょう</sup>なんて、これは木をこわがるのよ」